「生命操作」という語は否定的なニュアンスで語られることが多いが、「生命操作」と聞いて「なんだか気持ち悪い」と感じるような私たちの感覚は何に由来するのだろうか。講演では、生殖補助技術や臓器移植をはじめとする１９８０年代以降の「先端医療」が、それまでとは質の異なった生命操作システムやそれを正当化する言説システムを伴っていることに注目し、そうしたシステムにおいて何が隠されているのかを明らかにしつつ、今日私たちが「医療化」の一歩手前で、自分たちの生と死を問い続けるためにはどのような認識が必要とされるのかについて、聴衆のみなさんとともに考えたい。